



今月の話題

- 最終発表会の開催(8月3日、4日)
- トンガ元研修生のIISEE訪問
- 地震工学通年研修2022-2023閉講
- 閉講式での研修生代表答辞
- 学位記授与式ー政策研究大学院大学ー
- 関西研修旅行のレポート
- 東京・群馬研修旅行のレポート
- 新着論文紹介

最終発表会の開催(8月3日、4日)

国際地震工学センター センター長 芝崎 文一郎

8月3日から2日間に渡り、2022-2023 レギュラーコースの個人研修最終発表会を開催しました。

最終発表会は、地震学、地震工学及び津波防災の3コース共同で行っており、研修生14名全員が参加し修士論文における研究成果を発表しました。

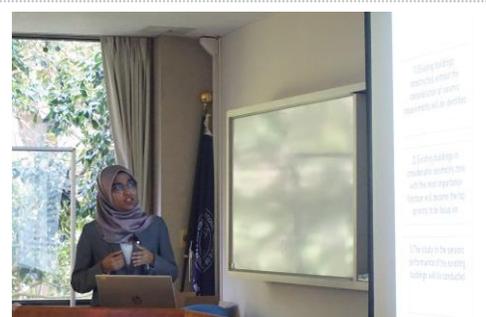
研修生全員が修士論文を完成させたことを大変嬉しく思います。

また指導教官の先生方には、丁寧なご指導をいただきました。最終発表会ではオンラインでご参加頂きました。

ここに御礼申し上げます。



イブラヒムさん(Sコース、エジプト)



ジハンさん(Eコース、マレーシア)

トンガ元研修生のIISEE訪問

国際地震工学センター 管理室長 秋葉 泰彦

8月29日・30日の2日間にわたり、トンガの研修修了生の Mafoa Latu PENISONI 氏(2020-2021 地震学コース)、Victorina Stephanie Nodis LEGER 氏(2021-2022 地震工学コース)が国際地震工学センターを訪問しました。両氏はコロナ禍により遠隔受講し、来日せずに研修を修了しておりました。

29日にはセンター内視察と担当教官との懇談を行い、30日に研究発表、澤地理事長表敬、IISEE 内での昼食会、締めくりに意見交換が行われました。



集合写真



研究発表風景

研修データベース

シノプシス・データベース(修士論文概要)

Bulletin データベース

Eラーニング

IISEENET(地震防災技術情報ネット)

IISEE-UNESCO レクチャーノート

地震工学通年研修 2022-2023 閉講

国際地震工学センター 管理室長 秋葉 泰彦

昨年10月5日からスタートした地震工学通年研修の閉講式が、9月12日(火)に建築研究所にて執り行われました。

今年は、8カ国14名(インド(1)、インドネシア(2)、エジプト(3)、コモロ(1)、フィジー(2)、フィリピン(1)、ブータン(1)、マレーシア(3))からの研修生が参加し、研修生全員に研修修了証と科目履修証が授与されました。

この研修期間中、各国から選抜された研修生は、地震学、地震工学、津波防災の3つのコースに分かれ、それぞれの専門性を考慮した講義を受講するとともに、母国で抱える個別の課題に対応するための調査研究をまとめました。

式では、政策研究大学院大学の片山防災政策プログラムディレクターが最優秀研究賞3名を、その後芝崎センター長がIISEE優秀賞4名を発表しました。

最後にインドネシアのハルヴァンさんが研修生答辞を述べました。

研修で得た知識や人的ネットワークを活かし、母国での活躍をお祈りいたします。



JICA 筑波国際センター
睦好 絵美子 所長



建築研究所
福山 洋 理事



政策研究大学院大学
防災政策プログラムディレクター
片山 耕治 教授

地震データベース

地震情報

宇津カタログ(世界の地震被害)

地震カタログ(世界の大地震の震源メカニズム、余震分布等)



修了証書授与 マリアマさん
(Sコース、コモロ)



ディプロマ授与 コロイさん
(Tコース、フィジー)



最優秀研究賞を受賞したパウロさん
(Sコース、フィリピン)



最優秀研究賞を受賞したフェイスさん
(Eコース、インドネシア)



最優秀研究賞を受賞したパタンジャリさん
(Tコース、インド)



IISEEセンター長賞を受賞したハニアダムさん
(Sコース、エジプト)



IISEEセンター長賞を受賞したツイーリングさん
(Eコース、ブータン)



IISEEセンター長賞を受賞したナスハさん
(Eコース、マレーシア)



IISEEセンター長賞を受賞したエルベビリさん
(Tコース、エジプト)



集合写真



閉講式での研修生代表答辞

ハルヴァン ムハンマド (インドネシア) 津波防災コース

国際協力機構筑波センター 睦好恵美子所長、建築研究所 澤地孝男理事長、政策研究大学院大学プログラムディレクター片山耕治先生、国際地震工学センター所長 芝崎文一郎先生、ご来賓の皆様、研修生の皆様、こんにちは。

私たちの研修の終了を祝うためにお集まりいただいたこの瞬間、私は私が好きな日本のことわざの一つ「千里の道も一歩から」を思い出します。それは数千マイルの旅もただの一歩から始まるという意味です。



ハルヴァンさん

私たち研修生が日本に来てからもうすぐ1年が経とうとしていますが、このことわざは私たちが日本に来たばかりの時を思い出させてくれました。一人で来た人もいましたし、大切な人を家に残して来た人もいましたし、この研修で何が得られるのか知らずに来た人もいます。しかし、1年前に私が見たのは、学問の道へ第一歩を踏み出す決意に満ちた顔でした。

この研修を通して過ごした時間はとても貴重であり、そのそれぞれが成長、学び、発見の瞬間を表していると言えるでしょう。私たちは困難に立ち向かい、チャンスを活かし、目標を達成するためにたゆまぬ努力をしてきました。しかし、すべてはその最初の一步、知識を追求し、この教育的な冒険に踏み出すという決断から始まったことを忘れないでください。

もちろん、ここの教授やスタッフ全員の助けがなければ、ここでの私たちの旅はここまで実り多く、楽しいものとはなりません。研修生全員を代表して、心より感謝を申し上げます。IISEE、GRIPS、その他のキャンパスや機関の教授たちは、私たちに知識を与えてくれただけでなく、私たちを鼓舞し、その専門知識と指導によって私たちの考え方に常に疑問を投げかけてくれました。彼らの教育への献身があったからこそ、私たちは今日この日を迎えることができました。

また、研修が円滑に回り、私たちの学業生活が可能な限り快適になるように常日頃からサポートをして下さった IISEE/BRI のスタッフの皆様にも感謝をしたいと思います。

最後になりますが、研修の間ずっと支援をしてくださいました JICA とその職員の皆様に深く感謝いたします。皆様なしでは私たち研修生はここにいることすらできなかったからです。JICA 奨学金プログラムと取り組みは、私たちが今日この日を迎える上でなくてはならないものでした。私たちの可能性を信じ、世界トップクラスの教育を受ける機会を与えてくれてありがとうございました。

最後に、私たち卒業生が無事に研究を終えて目標を達成したことをお祝いしたいと思います。しかし、これが旅の終わりではないことは忘れないでください。これは人生が私たちに投げかける新たな旅の始まりにすぎません。生きて新たな冒険を楽しむということへの揺るぎない決意を持ち続けましょう。

最後にもう一度、本当にありがとう。それぞれの母国へ安全に帰国されますように。これからもお互いに連絡を取り合い、そして将来またお会いしましょう。



楽しむのは今です

学位記授与式—政策研究大学院大学—

国際地震工学センター 管理室長 秋葉 泰彦

地震工学通年研修は、独立行政法人国際協力機構及び政策研究大学院大学との連携により、所定の成績を収めれば、修士(防災政策)号を取得することが可能な研修となっています。

今年は、9月13日(水)に、一部遠隔での参加があった前回までと異なり、地震工学通年研修に参加した研修生全員が政策研究大学院大学で行われた学位記授与式に出席しました。

地震工学通年研修 2022-2023 コースの実施にあたって、ご協力いただきました関係者の皆様には、心から感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

成績優秀者賞受賞者： ハルヴァンさん（インドネシア）



学位授与式

連絡先

IISEE ニュースレターは、IISEE と卒業生の架け橋を目指しています。

ニュースレターへの報告や記事をお待ちしております。皆様の自国でのご活躍をお知らせ下さい。

また、皆様の同僚やお友達もこのメーリングリストに登録するようにお誘い下さい。

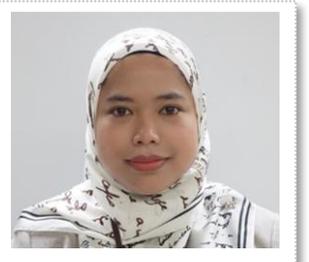
iiseenews@kenken.go.jp
<https://iisee.kenken.go.jp/jp/>

関西研修旅行のレポート

(1) ヌルル ザワニ ビンティ ハミドン（マレーシア）地震工学コース

2023年8月22日から25日にかけての関西地方への研修旅行では、自然災害、特に阪神大震災がもたらした甚大な影響と、その後の日本における減災とインフラ耐性の革新について理解を深めることができました。

私たちの旅は、人と防災未来センターを訪れることから始まりました。この施設は、1995年の阪神・淡路大震災を痛切に思い起こさせるとともに、災害への備えと都市の回復力に対する日本の献身的な取り組みを紹介しています。大変興味深い多くの展示を通して、私たちは市民を襲った悲劇と、その後の復興と再生の取り組みについて学びました。生存者の語りは、強固な災害対応システムを育成する必要性を私たちに改めて認識させました。



バックナンバーは
下記をご覧ください。

<https://iisee.kenken.go.jp/jp/newsletter/>

その後、防災科学技術研究所(NIED)に向かいました。ここでは、予測不可能な自然の力に対抗するための最先端の研究が行われています。地震の被害を最小限に抑えることを目的とした高度な地震シミュレーション技術やインフラ設計の紹介がありました。地震の予測やシミュレーションに対するこの施設の積極的なアプローチは、将来の災害から国民やインフラを守るという日本の責任感を浮き彫りにしています。



翌日、私たちのグループは、世界で2番目に長い吊り橋である明石海峡大橋に驚嘆しました。展示センターでは、1995年の地震の影響で橋が1メートル近く延長された後に再設計されたという、この橋のユニークな工学的適応について学びました。最も印象的な話のひとつは、1995年の阪神大震災にまつわるエピソードです。地震が発生したとき、橋は建設中で、2本のタワーが1メートル近く移動し、大きな被害をもたらしました。技術者たちはこれを挫折と捉えるのではなく、新たな機能を取り入れる機会と捉え、橋の耐震性をさらに高めました。橋の上からのツアーは特に爽快で、周囲の海の景色を一望でき、インフラの回復力の具体的な例を見ることができました。この橋は、逆境に直面しても革新し続ける人類の能力の証です。



旅の最後に、野島断層保存館を訪れました。ここには、1995年の地震の記録として野島断層がそのままの状態で作保存されています。地球の予測不可能な力をまざまざと思い知らされました。同館は震災後の地震研究を幅広く記録し、地殻変動とその結果についての理解を深めています。ここはまた、現代における地質学的・地震学的研究にも一役買っています。科学者や研究者がこの場所を研究に利用することで、地震に関する幅広い理解に貢献し、防災の取り組みにも役立っています。

関西への4日間の研修旅行は、厳かな思い出と畏敬の念を抱かせる革新的な発見が融合したものでした。私たちは災害への備えの重要性をより強く認識し、日本の不屈の精神と、より安全な未来を確保するための高度な技術的進歩に深い賞賛の念を抱いて帰路につきました。



(2) ハルヴァン モハメッド (インドネシア) 津波防災コース

2 日目 - 広川町と大阪市内

・濱口梧陵記念館

2 日目は、和歌山県広川町にある濱口梧陵記念館を訪れました。濱口梧陵記念館は、日本の著名人の一人である濱口梧陵に捧げられた建物であり、津波防災教育センターとしても機能しています。私たちはここで、濱口梧陵の生涯と、1854 年の安政の大津波の際に広川町の人々の命を救った彼の努力について学びました。濱口梧陵は、津波が来ることを知らせるために自分の稲束(稲村)を燃やし、人々に避難の道を示したそうです。この彼の行動は「稲むらの火」として後世に語り継がれました。



津波によって村は壊滅的な打撃を受け、梧陵さんは故郷を復興させるために目覚ましい行動を起こすようになりました。彼は被災者のための避難所の建設など、村の復興に尽力し、また、長さ 600 メートル、高さ 5 メートルの防潮堤の建設にも着手し、将来の津波の影響を大幅に軽減しました。

津波防災教育センターは津波の科学と影響、そして災害に対する心構えについて、見学者にいくつかのアトラクションを提供しています。ゲームやビデオで津波への備えを学んだり、ミニ津波を見て津波の影響や波の形が通常の波とどう違うかを学んだり、津波の歴史の中でどのように津波への備えが受け継がれてきたかを知ることができます。



津波防災教育センター内(左) 津波への備えを学ぶためのゲームやビデオ、「稲むらの火」に関するインフォグラフィック壁(右)

・津波・高潮ステーション

次の目的地は、大阪市にある津波・高潮ステーションです。大阪は日本有数の大都市であり、人口も多く、もともとは氾濫原にあり、海面下に沈んでいました。しかし、海面が下がるにつれて、多くの人々がこの地域に住み始め、その周辺に都市を築き始めました。ところが、都市開発が進むにつれ、いくつかの問題が浮上してきました。大阪市の一部は平均海面下にあるため、大阪は大雨や台風、高潮の際に特に浸水しやすくなっているのです。

同ステーションは、大阪市の沿岸・水災害を防ぐ拠点として設立されました。防潮堤や水門などの津波・高潮対策施設の監視、制御、応急対応サービスを提供しています。現在は、大阪市民の防災意識を向上させるための学習センターとしての役割も担っています。



津波・高潮ステーションの建物と内部

・人と防災未来センター

1995年に発生した阪神・淡路大震災を記念して建設された施設です。阪神大震災の犠牲者を追悼するとともに、災害リスクの軽減、準備、対応、復興に関する教育プログラムを提供し、災害に強いまちづくりの重要性に対する認識を高め、知識の共有を促進することを目的としています。

訪問中、私たちは神戸地震の状況に関するいくつかのドキュメンタリー映画を鑑賞しました。また、震災の悲惨な後遺症を示すジオラマ、文書、遺品、写真を展示した博物館も見学しました。これらの資料を提供することで、研究者、学生、一般市民が震災の影響と復興過程について学ぶための貴重な情報源となることを、この施設は望んでいます。



人と防災未来センター、内部には阪神・淡路大震災の遺品や記念品が展示されている

東京・群馬研修旅行のレポート

(1) マリアマ マディ (コモロ) 地震学コース

1 日目 本所防災館(東京)

初日、私たちは本所防災館における災害への取り組みについて視察しました。防災館では、水流が2週間以上かけてある地域から別の地域へ急速に広がるシミュレーションが行われていました。体験室では、豪雨や暴風雨を疑似体験し、その恐ろしさを身をもって実感しました。地震災害も同様に、損害や多くの人命が失われるといった悪影響を及ぼしています。また、地震シミュレーションでは、震動台で震度6および7の揺れを体験し、それがいかに大きかったかを体感することができました。水災害コースの研修生は地震を、地震コースの研修生は豪雨と洪水をそれぞれ体験する機会となりました。



(2) アダム ハニ アブエルナガ アメン (エジプト) 地震学コース

ハツ場ダム

群馬県の長野原にあるハツ場ダムは、洪水から命を守り、首都圏の水需要に応える重要な役割を果たしています。数十年をかけて建設され、2019年10月に実質的な完成を迎え、2020年4月1日、正式に運用が開始されました。この素晴らしいダムは、高さ116.0m、全長290.8m、総貯水量1億750万 m^3 を誇ります。





富岡製糸場

1872年設立の日本初の近代的製糸場である富岡製糸場は、フランスの専門技術を導入し最新の器機によって生糸の品質を高め、従事者の労働環境を向上させました。保存状態の良い建造物、特に製糸工場や東西の倉庫を含む3棟にわたるレンガ造りの建物は、長い年月を経ても当時の姿を保っていて、その歴史的意義や過程を垣間見ることができます。



新着論文紹介

(IISEE スタッフ、研修修了生などにより新しく発表された論文を紹介します。)

芝崎センター長 (Progress in Earth and Planetary Science)

タイトル: Progress in modeling the Tohoku-oki megathrust earthquake cycle and associated crustal deformation processes

著者: B. Shibazaki

DOI: <https://doi.org/10.1186/s40645-023-00575-x>

林田主任研究員ら (Seismological Research Letters)

タイトル: Tracking the effect of human activity on MeSO-net noise using seismic data traffic—Did seismic noise in Tokyo truly decrease during the COVID-19 state of emergency?

著者: T. Hayashida, M. Yoshimi, H. Suzuki, S. Mori, T. Kagawa, K. Ichii, and M. Yamada

DOI: <https://doi.org/10.1785/0220230015>